

氏名(本籍)	真保亨(東京郡)
学位の種類	博士(芸術学)
学位記番号	博乙第795号
学位授与年月日	平成4年3月25日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
審査研究科	芸術学研究科
学位論文題目	北野聖廟絵の研究

主査	筑波大学教授	文学博士	相馬	隆
副査	筑波大学教授		角井	博
副査	筑波大学教授	文学博士	熊倉	功夫
副査	筑波大学教授		宮脇	理

### 論文の要旨

本論文は、日本の数ある絵巻の中で、はじめて内容形式ともに本格的な縁起絵巻の体裁を備えて作られた承久本北野天神縁起を中心に、鎌倉時代成立した主要な諸本をあわせて、絵巻本来の北野聖廟絵の名称のもとに全体をまとめ、それらの相互の関係を考究し、その展開の様相を明らかにせんとしたものである。

甲類(承久本等)・乙類(津田本等)・丙類(弘安本等)という三種の分類法など従来詞書の側面からのみ行われてきた研究を不十分とみた著者は、絵巻を構成する絵と詞書の両者を綿密に比較検討して、その複雑な関係の解明を試みている。

内容は、第一章の序論よりはじまって、第十章まで合せて四十三節の構成よりなる。諸本を研究した各章は、またそれぞれ独立した論文と見做すこともできるが、総じて統一された方法を通じて、一貫して北野聖廟絵の流れを論述している。

第一章序論は、縁起の生成から絵巻における縁起の発生を説き、その嚆矢としての承久本北野聖廟絵の登場にふれ、かつ名称の問題に移り、次で菅公の生涯から北野天神信仰に至る推移を叙述し、縁起本文の典拠を明らかにしその成立の推移を述べている。

第二章は、根本縁起と称される承久本についての論究である。先ず全八巻の内容を述べるが、殊に六道絵の部分については、詳細に分析を行ってその性格を明確にし、今まで行われてきた往生要集依拠説など根拠を失うに至った。縁起後半のない承久本の現状については、単なる未完成説・承久の乱による計画変更説・六道絵を結末とする完成説など今まで様々な意見があったが、明確でなかった承久本に付随する白描下絵の各場面の主題を解明した上で、全体完成を目前にして、承久の乱で制作が事半ばで止めざるをえなくなったことを述べる。他に例を見ぬ大がかりな凄まじい六道

の描写については、これを安楽寺本系縁起の影響であることを初めて提唱している。画風から似絵の影響を認めながらも作者については、信実とすることに躊躇し、根拠のない推定は絵・詞書筆者に関してともにこれを避けている。

第三章は、甲類の一古本である北野本地本が、詞書の一部にこの安楽寺本系縁起を用いていることを筑波大学本との対比によって初めて明らかにし、制作年代に関して、その内容の検討によって、正嘉二年（一二五八）の丙類正嘉本と永仁六年（一二九八）の乙類津田本の間で作られたことを推定している。その結果、北野本地本詞書の原資料である安楽寺本系縁起は、鎌倉末期以降とみていた大方の予想に反し、十三世紀前半にまで遡らせる事が可能となったとする。またその画風の特色から、彩色前の下絵でも完成された白描画でもなく速成の絵巻であったと推察している。

第四章は、『道賢上人冥途記』を明細に絵巻化した部分加わった異色の絵巻メトロポリタン本について述べる。北野本地本に近いが直接的関係はなく、古く共通の祖本から分れた甲類の一本とし、日蔵巻を特に表わして一卷とし、通行の三巻に増補したものとみている。ただ、日蔵巻も『冥途記』の忠実な絵巻化とは言い難く、結末の満徳法主天城巡歴以下を欠いて『冥途記』にない一般的な日蔵上人奏上段に替えるなど、絵巻化に際して先行諸本を参照したことを指摘している。また鎖簡復原に関しては、風神図の位置の矛盾を明快に解いていることが特記されよう。

第五章は、鎌倉荏柄社伝来の甲類では掉尾を飾る荏柄本につき述べる。巻末の元応元年（一三一九）の奥書にみる藤原行長が担当絵師として従来巷間に流布されてきたが、行長を奥書の内容から奉納者と考え、霜月騒動で兄行景を失った二階堂家の長老行長が多年の宿望を遂げたものと解している。また諸本との綿密な比較により、時代の下がるものながら、詞書・絵とも意外に古様を伝える独自性の高い一本であることを示唆しており、絵の作者については、中央画壇の名ある画家の手になるものと述べる。

第六章は、安楽寺本系について述べる。この系統は冒頭の語句からいっても、先の甲乙丙三類の何れにも属しない謂わば丁類と称すべきもので、従来美術史の上では全く取り上げられていなかったが、著者は丁類と絵巻の関係に初めて取り組んでいる。都良香羅城門詩作段の補入説を否定するなど、その内容の検討から成立を十三世紀前半にまで遡らせ、北野本地本との係わりや、さらに承久本の六道描写に影響を与えたことに言及している。

第七章では津田本を扱う。乙類の最古本として、従来甲類に次ぐ乙類第一種本に位置付けられていた津田本を、諸本との比較調査によって、甲類とともにまた丙類の影響の著しいことを明らかにしている。従って、北野聖廟絵展開の順序を考えるならば、甲類から乙類丙類へという単純な流れではなく、甲類から丙類、さらに乙類へという図式が浮上するに至ったことを導きだしている。また、絵の作者はその画風から、願主宇都宮親泰の周辺の関東画人に求むべきことを提唱している。

第八章は、丙類弘安本の典拠となった正嘉本の系統について述べる。正嘉本系は、建治・延文奥書のある零本や近世書写の上宮天満宮本絵詞があり、これらを詳しく検討した結果、前者については従来信じられてきた建治・延文奥書本の建治三年（一二七七）制作の自描絵巻に、凡そ八十年後の延文五年（一三六〇）彩色されたということを見直し、かなり時代の下る転写本に位置付けてい

る。絵詞も現状では弘安本と別本のようにみえるが、内容を分析すれば、誤写や改革があるにせよ弘安本の典拠と見做される正嘉本の有力な資料とみることができると述べている。

第九章は、丙類の最優作である弘安本について述べる。古くから大半が分散し一部は失せてしまった弘安本について、その転写本である根津美術館本・宮内庁本を参考に、また修理前の著者の調査記録等によって修理原案となった錯簡復原を試みており、全体の構成や当初六巻であったことを明らかにしている。

第十章は、防府天満宮の松崎本を取り上げる。同本が弘安本を基に絵・詞書とも多少の改訂をも施し、二段の靈驗説話と三段一卷の自社縁起を増補して成っていることを述べた上で、丙類に於ける位置を明らかにしている。そして、従来弘安本によって部分は単なる弘安本の模本と考えられていた点を見直し、画図・詞書ともに独自性を表出して制作されていることを分析の結果明らかにしている。

最後に諸本の特色と相互関係を概観し結語としている。

## 審 査 の 要 旨

美術史は作品研究を基本とすることは言うまでもないが、特に絵巻物の研究に関しては、すべて実物に当たっての綿密な全巻調査が要求される。著者はこの困難を克服し長年にわたって積み重ねた詳細な調査実績をもとに、研究を進めてきただけあって、本論文はその点論旨にそれぞれ確固たる裏付けがみられ、その説の一部は、既に実作品の復原修理（弘安本・承久本白描下絵）にそのまま用いられ実施されていることによっても、斯界の認めているところとなっている。論文に取り上げた各作品も、そういう著者の慧眼によって選別されており、現時点で最も当を得た過不足ないものと思われる。類本の多い絵巻物の研究は、きわめて難しく、ともすれば詞書方面に、或は画図のみに偏ってしまい総合的な研究が行われずに終わってしまうことが少なくない。著者は、従来の研究にみるこれらの短所を克服して、絵・詞書という絵巻物の両面から諸本相互の比較を行って、論を進めている点、より良い結果を導き出したものと言えよう。

最も中心となる承久本については、安楽寺本系の影響を提唱し、かつ安楽寺本系と絵巻の関係は北野本地本で明らかにし、安楽寺本系の成立年代を十三世紀前半にまで上らせたことは、絵巻物研究に一石を投ずるものであろう。それとともに津田本の詳細な分析によって、乙類の性格が改めて見直され、そして安楽寺本系丁類の新たな登場によって、甲乙丙という三種の分類法は、ここに再考されるに至ったと言える。

本論文の各章は、そのまま各本の独立した研究論文ともなり、それぞれ随所に新知見が披露されている。中でも建治延文奥書本については、今まで画風の検討よりも、奥書を信じ、それから絵の制作年代を考えずに決めてしまった節があったが、従来この建治制作説は図様の矛盾をここで指摘され一挙に崩壊してしまった。本論文は既存の曖昧な通説を慎重に再検討することによって、より正確な事実が明らかになることを指し示すものといえる。ただ、慎重さを期すあまり各作品の画

家の究明にさほど論及していなかったが、大胆に名前をあげることを避けるとしても、絵画史の根源であるその点にもっと試論を廻らせてほしかったし、また同様なことは詞書筆者についてもいえることである。また、本論文で取り上げた鎌倉期の代表作例の他、室町期の諸本をも含めた総合的な研究も、いわば続編として今後の著者に与えられた課題であり、その早期の完成が望まれる。

とはいえ、中世縁起絵巻のうちで最も代表的な北野聖廟絵に関し、その全体像をまとめ、かつ幾多の新事実を明らかにした点、本論文は高く評価されよう。

よって、著者は博士（芸術学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。